

道徳教育におけるキャリア教育の可能性

— 「私たちの道徳」公開を踏まえて —

渡部 昌平¹・小池 孝範²

はじめに—問題の所在

2014年2月、文部科学省はこれまでの道徳教育用教材「心のノート」を全面改訂し、児童生徒が道徳的価値について自ら考え、実際に行動できるようになることをねらいとして作成した「私たちの道徳」(小学校1・2年、小学校3・4年版は「わたしたちの道徳」、以下、これらを総称する際は「私たちの道徳」と表記する。)を公開した。この「私たちの道徳」は平成26年度から使用できるよう全国の小中学校に配布された。また2014年10月に中央教育審議会は小中学校の「道徳の時間」を「特別の教科」に位置付けることなどを盛り込んだ答申をまとめた。ただし、この答申は、道徳教育全般にわたる検討がなされており、キャリア教育については、「2 道徳に係る教育課程の改善方策、(4)多様で効果的な道徳教育の指導方法へと改善する、④学校と家庭や地域との連携の強化について」の中での例示にとどまっている。そのため、今後の学習指導要領の改訂等を踏まえつつ、改めて検討することとし、本稿では、現行の学習指導要領(平成26年10月現在)の内容について検討することとする。

道徳教育においては、これまでもキャリア教育とのかかわりを明確にすることが求められてきたし、学習指導要領におけるキャリア教育に関する主な目標・内容等も例示されている(例えば[文部科学省、『小学校キャリア教育の手引き(改訂版)』、2011: pp.54-55])。具体的には、「小学校学習指導要領」における道徳の

目標における「自己の生き方についての考えを深め」ること、内容として「働くこと」と直接関わるものとしては、「働くことのよさを感じて、みんなのために働く」(第1・2学年の4-(2))、「働くことの大切さを知り、進んでみんなのために働く」(第3・4学年の4-(2))、「働くことの意義を理解し、社会に奉仕する喜びを知って公共のために役に立つことをする」(第5・6学年の4-(4))、また「中学校学習指導要領」でも「勤労の尊さや意義を理解し、奉仕の精神をもって、公共の福祉と社会の発展に努める」(4-(5))など、直接「働くこと」や「勤労」の意義や尊さ、大切さがあげられているほか、集団への参加やその中で役割を果たすことの重要性(小学校5・6年4-(3)、中学校4-(4))、自分の特徴に気付き、長所を伸ばすこと(小学校3・4年1-(5)、同5・6年1-(6)、中学校1-(5))など多様な内容がキャリア教育に関連している。

そもそも「キャリア教育」という文言が公的に登場し、その必要性が提唱されたのは、平成11(1999)年の中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続に改善について」においてであった[文部科学省、『小学校キャリア教育の手引き(改訂版)』、2011: 3]。その必要性や意義の理解は、学校教育の中で高まっていることが、平成23年の中央教育審議会答申「今後の学校教育におけるキャリア教育・職業教育のあり方について」で示されている。しかし、この平成23年の答申では、「新しい教育活動を指すものではない」としてきたことで、

¹総合科学教育研究センター

²秋田大学 教育文化学部

「従来の教育活動のままでよいと誤解」されたり、「体験活動が重要」という側面のみをとらえて、「職場体験活動の実施をもってキャリア教育を行ったものとみなしたりする傾向」があることなど、課題も指摘されている。

特に、道徳教育と関連する指摘としては、キャリア教育を「勤労観・職業観を育てる教育」としたこともあり、「勤労観・職業観の育成のみに焦点が絞られてしまい」、結果的に「社会的・職業的自立のために必要な能力の育成がやや軽視されてしまっていること」が課題としてあげられている。この平成23年の答申では、「キャリア」を「人が、生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自分の役割の価値や自分と役割の関係を見いだしていく連なりや積み重ね」と位置付けている。

であるならば、道徳教育におけるキャリア教育も、「働くこと」や「勤労」の意義や尊さ、大切さに関わるものだけでなく、集団への参加やその中で役割を果たすことの重要性や、自分の特徴に気付き、長所を伸ばすことも射程に入れ、広くこれを展開していくことが必要となるだろう。また、「キャリア」を広くとらえていくことは、個々の内容項目のみならず、「道徳の時間の目標」である「道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深め（中学校：道徳的価値及びそれに基づいた人間としての生き方についての自覚を深め）、道徳的実践力を育成する」ことに位置付けていく必要があるだろう。

そこで本稿では、文部科学省による「私たちの道徳」が公開されたことを踏まえ、道徳教育の中でキャリア教育をどう実践することができるのか、なぜ道徳教育の中でキャリア教育を実践すべきなのかを検討することを目的とした。

I 道徳教育におけるキャリア教育の

現状と課題

「私たちの道徳」公表までの道徳教育の「改善」の流れ

平成20年の中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」において「我が

国の子どもたちは、生命尊重の心や自尊感情が乏しいこと、基本的な生活習慣の確立が不十分、規範意識の低下、人間関係を築く力や集団活動を通じた社会性の育成が不十分」等といった指摘をあげつつ、平成20年・21年に改訂された新学習指導要領において道徳教育等の充実・改善が図られた。

具体的には、小学校・中学校では、①発達の段階に応じた指導内容の重点化（※小学校では「あいさつなどの基本的な生活習慣」「人間としてしてはならないことをしないこと」「集団や社会のきまりを守ること」、中学校では「主体的に社会の形成に参画すること」等）、②児童生徒が感動を覚えるような魅力的な教材の開発や活用、③道徳教育推進教師（道徳教育の推進を主に担当する教師）を中心とした指導体制の充実、④道徳の時間の授業公開、家庭や地域社会との共通理解・相互連携であり、高等学校では、①学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育について全体計画の作成、②人間としての在り方生き方に関する学習の充実、である。

そしてこれら充実・改善に向けた取り組みの一つとして、平成14（2002）年に作成された「心のノート」を全面的に改訂した「私たちの道徳」が平成26（2014）年に公表されるに至っている。「心のノート」「私たちの道徳」とも、「とくいなこと」「いちばんうれしかったこと」「できるようになりたいこと」「しょう来のゆめ」（小学校1・2年の例）などキャリア教育に必要な能力・価値観・興味を明確にさせるような項目の記載がある。「心のノート」から「私たちの道徳」への改訂で特に変更されている点は読み物資料（10資料程度）の追加であるが、読み物資料のほとんどは既に文部科学省から追加的に出されていたものの再録であることは注意しなければならない。

道徳教育の実施状況及び課題

文部科学省が平成24年5月～6月に実施した「道徳教育実施状況調査」によると、道徳教育の年間指導計画はほとんどの小学校・中学校が作成しており（小学校99.6%、中学校99.7%）、また道徳教育推進教師等もほとんどの小学校・中学校で配置されている（小学校・中学校とも

99.9%)。年間指導計画の中には指導時期・主題名が9割以上の学校で含まれ、ねらい・資料名も8割以上の学校で含まれているものの、主題構成の理由・展開の概要及び指導の方法を含めている学校は少ない。即ち、道徳教育への意味づけや方法論については現場でも未だに迷いがあることが示唆されている。

また同調査では道徳教育を実施する上での課題として「指導の効果を把握することが困難である」(小学校48.3%、中学校42.7%)、「効果的な指導方法が分からない」(小学校33.2%、中学校38.9%)、「適切な教材の入手が難しい」(小学校28.1%、中学校37.3%)など、「効果把握」「方法論」「教材」の課題が上がっている。なお同調査では前年度に使用した教材に関する調査があるが、「心のノート」(小学校90.6%、中学校84.9%)、民間の教材会社で開発・刊行した読み物資料(小学校86.3%、中学校81.3%)、都道府県や市町村教育委員会において開発・刊行した読み物資料(小学校62.7%、中学校54.2%)、書籍・雑誌(随筆、評論、小説、詩、伝記等)(小学校53.5%、中学校67.1%)となっており、「心のノート」(当時)の利用が最も多いことが分かっている。

ただし、「心のノート」では読み物資料が不足していたために、改訂された「私たちの道徳」では10資料程度の読み物資料が加えられたが、多くの学校では35時間程度の道徳教育を実施(小学校35.7時間、中学校35.1時間)する中で、これら読み物資料でも十分ではないことが指摘されている。「心のノート」時代を含め、多くの学校で副読本が用いられているが、その副読本の選定、また教育方法・効果把握に現場が悩んでいることが見受けられる。

さらに道徳教育の校内研修であるが、1回実施(小学校38.1%、中学校37.5%)、2回実施(小学校27.7%、中学校32.1%)に次いで「実施していない」(小学校26.2%、中学校22.6%)が多くなっている。同調査ではその原因や理由については触れていないが、道徳教育への意味づけや方法論への迷いから実施されていないことも推察される。

そして道徳教育におけるキャリア教育の取り組みの課題としては、道徳教育における実践で

は、「道徳の時間における「勤労観」の学習が中心で、その先への広がりには乏しいように見える」(西野, 2012: p67) ことである。さらに西野(2012: p68)は「キャリア教育の充実が最も期待されている高等学校に、小・中学校のような「道徳の時間」が設置されていない」という課題を指摘する。

道徳におけるキャリア教育の展開(道徳においてキャリア教育を行う意義)

上記のとおり、道徳教育において「心のノート」「私たちの道徳」などの新たな教材が示され、それらの教材は大いに活用されている。一方で、現場では、道徳教育の意味づけや方法論、効果把握、そして教材自体についての「迷い」「悩み」「広がりやつながりのなさ」が見られることが示唆されている。「心のノート」で足りなかった読み物資料が「私たちの道徳」では(10資料程度)追加されているが、それでも「足りない」とされている現状がある。また「私たちの道徳」に掲載されている読み物資料を現場でそのまま使えるのか、という課題もある。

キャリア教育は「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」(中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」)と定義されている。この背景として、文部科学省『キャリア教育の手引き』では「産業・経済の構造的変化、雇用の多様化・流動化等は、子どもたち自らの将来のとらえ方にも大きな変化をもたらしている。子どもたちは、自分の将来を考えるのに役立つ理想とする大人のモデルが見付けにくく、自らの将来に向けて希望あふれる夢を描くことも容易ではなくなっている」と解説している[文部科学省, 『小学校キャリア教育の手引き<改訂版>』, 2011: 9頁]。同手引きではさらに「日常の教育活動を通して、学ぶ面白さや学びへの挑戦の意味を子どもたちに体得させることが大切である。子どもたちが、未知の知識や体験に関心をもち、仲間と協力して学ぶことの楽しさを通して、未経験の体験に挑戦する勇気とその価値を体得することで、生

涯にわたって学び続ける意欲を維持する基盤をつくることができる。また、多くの学校で実践されている自然体験や社会体験等の体験活動は、他者の存在の意義を認識し、社会への関心を高めたり社会との関係を学んだりする機会となり、将来の社会人としての基盤づくりともなる」とし、「学び」「協力」「体験」等の重要性を説いている〔文部科学省、『小学校キャリア教育の手引き〈改訂版〉』, 2011: 9頁〕。

こうした指摘を踏まえるならば、道德教育の中の柱の一つにキャリア教育を位置づけることで、道德教育への意味づけや方法論に一つの指針を提供することができるだろう。即ち、「良き社会人を目指すに当たって、また良き人生を送ろうとするに当たって、児童・生徒にとってこうした自らの価値観や責任感、姿勢を考えさせる教育は必要である」という意味付けである。また児童・生徒の自立意識やその基盤となる能力や態度を把握することで、道德教育の「効果把握」も可能となる。教材についても「いわゆる道徳的なもの」だけでなく、社会人（プロスポーツ選手などを含む）の学びや教え・教訓といったものが活用可能となり、「目指す未来の目標から、今の学び・生活を考え直す」ことが可能となる。またキャリアを横軸として、他の教科や課外活動との「つながり」を持つことが可能となる。

過去・現在と未来をつなぐ、家庭・学校生活と社会をつなぐことで、児童・生徒の現在の生活の意味や意義を明確化し、「やるべきこと」が明白になる。こうした明確化を道德の時間に行うことで、児童・生徒にとって他の教科の時間の意味や意義が明確になり、道德教育だけでなく学校生活全体に意味や意義を与えることもできるのである。

II 「私たちの道徳」における働くことの取扱い

学習指導要領に示されている「道徳の内容」の内、「働くこと」と直接関わるのは、小学校1・2年、3・4年の4-(2)、5・6年の4-(4)、中学校の4-(5)である。その内容は、以下の表1の通りである。

ここでは、学年・学校段階に応じて、発展的に展開されていることが看取される。以下では、この内容における「ねらい」を確認したい。ただし、「私たちの道徳」活用のための教師用参考資料はまだ公表されていない。しかし、「私たちの道徳」は、「心のノート」を全面改訂したものと位置付けられているため、その趣旨は基本的に「心のノート」を踏襲していると考えられる。そこで、「心のノート」の「教師用参考資料として、全ページのポイントとその生かし方などを図版入りで解説」（文部科学省 HP より）している『「心のノート 小学校」活用のために 平成21年度改訂版』及び『「心のノート 中学校」活用のために 平成21年度改訂版』の当該内容をもとに検討する（以下、「活用」と略記する）。

まず、小学校1・2年の「4-(2):働くことのよさを感じて、皆のために働く。」では、「自分たちのために多くの人が働いていることに気づき、自分も周囲の人のために働くことができるようになりたいという意欲を高めていくきっかけにすることができる」（「活用」, p32）ことをねらいとしている（傍点、引用者補足。以下、注記がない場合同様）。「わたしたちの道徳」では、内容のタイトルとして「はたらく ことのよさをかんじて」（pp.130-137）を掲げ、町で働く人々、学校や家での手伝いの写真を載せ、働く姿と自分の働くことを結びつけられるようにしている（pp.130-131）。次頁では、

表1

学年・学校段階	内容項目	内容
小・1・2学年	4-(2)	働くことのよさを感じて、皆のために働く。
小・3・4学年	4-(2)	働くことの大切さを知り、進んでみんなのために働く。
小・5・6学年	4-(4)	働くことの意義を理解し、社会に奉仕する喜びを知って公共のために役に立つことをする。
中学校	4-(5)	勤労の尊さや意義を理解し、奉仕の精神をもって、公共の福祉と社会の発展に努める。

「わたしのしごと」という子どもの文章と、わたしのしごとについての書き込み欄があり、自分の仕事・役割の振り返りのページとなっている (pp.132-133)。その後、「森のゆうびんやさん」と題する4頁の読み物資料が付されている (pp.134-137)。小学校3・4学年の「4- (2)：働くことの大切さを知り、進んでみんなのために働く。」では、「働くことは、自分自身を伸ばすことであると同時に人の役に立つことでもある。集団の一員として働くことで、助かったり、喜んだりする人がいる」とした上で、これらのことを「感じ取り、自分にできることから、少しずつ人のためになる仕事などを始めていくようにしたい」と、そのねらいを示している (「活用」、p61)。「わたしたちの道徳」では、内容のタイトルとして「働くことの大切さを知って」を掲げ、「働くことの大切さ」として、様々な仕事をしている人の写真を、それぞれの仕事の喜びややりがいを吹き出しで付し、自分のしたい仕事、仕事の大切さについて感じたことを記入する欄が設けられている (pp.130-131)。続いて、「学校や学級でみんなのためにできること」(p132)、「家や地いきでみんなのためにできること」(p133)の振り返り等の記入欄、その後、様々な分野で活躍している (していた) 人の仕事に対する思いのコラムが掲載されている (pp.134-135)。

小学校5・6学年の「4- (4)：働くことの意義を理解し、社会に奉仕する喜びを知って公共のために役に立つことをする。」では、「自分らしさを求めている5・6年生の子どもは、集団や社会のために役に立つ自分を見つけることで、自分の存在価値をいっそう確かなものにしていく」とした上で、「働くことと、公共のために役に立つことを、子どもがつなげて考えられるように構成している。子ども自らができる範囲で社会の役に立とうとすることで、社会参画の意識も高められる」としている (「活用」、p95)。「私たちの道徳」では、「公共のために役立つことを」を内容タイトルとし、まず、「「働く」ということ」について、近江商人の理念——「売り手よし、買い手よし、世間よし」という「三方よし」の理念——を示した上で、自分のなりたい職業を、この三つの視点から考える内

容となっている (pp.152-153)。その上で、「社会のために力をつくす」例として東日本大震災での様々な支援活動をあげ、その背後にあった思いを考えさせた上で、自分にできるボランティア活動の記入欄を設けている (pp.154-155)。

中学校の「4- (5)：勤労の尊さや意義を理解し、奉仕の精神をもって、公共の福祉と社会の発展に努める。」では、「小学校のときには無邪気に語っていた将来の夢も、中学生になれば進路の話題とかかわり、現実味をもった話になってくる」と小学校との異同についてふれた上で、「自分の付きたい職業は何か、という個人的な問題に思いをめぐらせつつ、働くとはどのようなことなのかを考える。勤労の尊さや意味、奉仕の意義についての理解を深め、公共の福祉という国民的課題についても足を踏み入れるページでもある」(「活用」、p44)としている。中学校版の「私たちの道徳」では「勤労や奉仕を通して社会に貢献する」を内容タイトルとし、働くことが社会とどのようにつながっているのかを例示した上で (p172)、「働くことの実感」の場面、「働くことの楽しさ、難しさ」を問うている (p173)。その上で、「働くことの意義」を職場体験活動やボランティア活動を振り返りながら記入する欄 (p174)、「社会とのかかわり」を意識して社会貢献について自らの考えを記入する欄 (p175) が設けられている。続いて、「視聴覚障害者ランナー」の伴走者のことば (p176)、先人の「格言」(p177) が載せられている。続いて、「社会に参画する」との小見出しを付して、写真とともに「社会に目を向け、社会と関わり、社会をよくする。」とのことば、中学生を対象とした「まちづくり」に関するアンケート結果が示されている。

以上、「働くこと」に直接的にふれている「私たちの道徳」の当該箇所の内容について、「学習指導要領」における内容と「心のノート活用のために」での解説から概観してきた。小学校1・2年の段階では、働くことのよさを感じて意欲を高めるきっかけとすること、3・4年の段階では、働くことが自分自身にとってのみならず、他者にとっても役立つことであることを感じ取るとともに、実践的な取り組みにつ

なげること、5・6年の段階では、自他を越えて、社会や公共を意識しつつ、実践活動を通して自己のあり方を見つめなおすこと、中学校の段階では、生徒自らの具体的な進路をふまえつつ、より具体的に働くことの意義を理解するとともに、公共の福祉も視野に入れている。

したがって、「自分自身に関すること」から出発し、「他の人との関わり」をふまえつつ、「集団や社会との関わり」へと基本的には展開されているといえるだろう。このことは、子どもが成長する中で関わりを広げ、多様な世界にふれていくという一般的な理解に沿うものであるし、また、道徳性の発達に関する基本的な理解——「他律的な道徳性」から「対人関係や社会組織の道徳性」へと進み、最終的に「自律的な道徳性」に到達する、とする理解〔押谷 内藤，2012：pp.53-54〕——にも沿った発展的展開ということができよう。

また、「学習指導要領」において道徳の内容は子どもの道徳性を、「1. 主として自分自身に関すること」、「2. 主として他の人とのかかわりに関すること」、「3. 主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること」、「4. 主として集団や社会とのかかわりに関すること」の四つの視点からとらえているが、「働くこと」に関する項目としては、主として、1、2、4が関連している。「学習指導要領解説 道徳編」においては、「この四つの視点は、相互に深い関連をもっている」とした上で、それぞれの視点の関連について、①「自律的な人間であるためには、1の視点の内容が基盤となって、他の三つの視点の内容にかかわり、再び1の視点に戻ることが必要になる」。②「また、2の視点の内容が基盤となって4の視点の内容に発展する」。③「さらに、1及び2の視点から自己の在り方を深く自覚すると、3の視点がより重要になる」。④「そして、3の視点から4の視点の内容をとらえることにより、その理解は一層深められる」としている（小学校 p35、中学校 p37）。

「働くこと」については、「4. 主として集団や社会とのかかわりに関すること」に位置付けられているが、その内容の展開は、1から2、4へ、そして再び1へという流れで構成されて

いる点では、①の関連性を、また、働くことが役に立つことの視点が、「身近な人」（小1・2年）から「地域」（小3・4年）へ、さらに「社会」（小5・6年）、「公共の福祉」（中学校）への展開は、②2から4へという流れをふまえているといえるだろう。

当然、その際には、集団への参加やその中で役割を果たすことの重要性（小学校5・6年4-（3）、中学校4-（4））、自分の特徴に気付き、長所を伸ばすこと（小学校3・4年1-（5）、同5・6年1-（6）、中学校1-（5））、相手を思いやったり、助けあったりすること（小1・2年2-（3）、3・4年2-（2）（3）、5・6年、2-（2）（3）（5）、中学校2-（2）（3）（6））等々とも関連させながら展開していくことが必要だろう。

Ⅲ 道徳教育における キャリア教育の実践例

『小学校キャリア教育の手引き〈改訂版〉』では、「キャリア教育は、全教育活動の中で6年間を通して意図的・継続的に推進していくものである」し〔文部科学省、『小学校キャリア教育の手引き〈改訂版〉』、2011：p18〕、また、『中学校キャリア教育の手引き』においても「中学校の段階はキャリア教育実践にとって極めて重要な時期であるとした上で、「キャリア教育の視点で、各教科、道徳、総合的な学習の時間及び特別活動や日常生活におけるそれぞれの活動を体系的に位置付けることにより、能力や態度の効果的な育成を図る必要がある」としており〔文部科学省、『中学校キャリア教育の手引き』、2011：p26〕、学校教育全体の中で体系的に取り組む必要性をあげている。両手引きでは、キャリア教育と道徳教育との関連について多くの紙幅を割き、両者の親和性が高いことが看取される。

また、「道徳の時間」が教育課程に位置付けられていない高等学校においても、「小・中学校における道徳教育を踏まえつつ、道徳教育をキャリア教育と組み合わせながら実践していく必要がある」とされている〔文部科学省、『高等学校キャリア教育の手引き』、2011：p77〕。

その具体的な取り組みの例として、愛知県総合教育センター「高等学校における道德教育の推進の在り方に関する研究」（平成25年度）による「高等学校における道德教育推進のための一問一答集」（p14）では、キャリア教育と道德教育との関連について「道德教育を進めるに当たり、望ましい勤労観・職業観の育成を図る就業体験活動やボランティア活動、自然体験活動などは、生徒の豊かな心を育てる実践的活動であるので、一層充実させる必要があるとされており、キャリア教育における、望ましい勤労観・職業観をはぐくむ就業体験活動や人間としての在り方生き方について考える時間は、道德教育としても非常に意義深いものです。キャリア教育と道德的価値の自覚を図る学習とが響き合うよう工夫することが望まれます」としている。これまでの議論のとおり、キャリア教育と道德教育はとても親和性が高い。そしてキャリア教育のフィルターを通すことで、他教科や課外活動との橋渡しが可能となる。西野（2012：p67）は「道德教育とキャリア教育のめざす理念が互いに重なりあうことは、多くの論者に指摘されてきた」とする。

以下では各校が道德教育においていかにキャリア教育を実践しているかを取り上げて検討し、今後の課題を確認していくこととする。

小中学校における実践例

小・中学校においては35時間程度の「道德の時間」が「学校教育法施行規則」に位置付けられている（ただし、小学校第1学年のみ34時間）。徳丸（2009：pp1-4）は①道德の時間における読み物「母の仕事」、②総合的学習の時間における「MY DREAM CARD」（職業調べ）の作成、③道德の時間における「今の自分と未来の自分のロールレタリング」（その立場になって手紙を書く）を実践し、「自己内対話を通じ、夢のある将来の契機となる自己決定を促すことができる」と報告している。

さらに千葉（2006：pp28-34）は「小学校6年間を通じたキャリア教育と道德教育」ということで低学年・中学年・高学年のカリキュラムを示しているが、例えば低学年では人間関係形成能力（2-（1）気持ちのよいあいさつ、言葉遣

い、動作などに心掛けて、明るく接する、2-（3）友達と仲よくし、助け合う）、情報活用能力（1-（2）自分がやらなければならない勉強や仕事は、しっかりと行う、2-（4）日ごろ世話になっている人々に感謝する）、将来設計能力（4-（1）約束やきまりを守り、みんなが使う物を大切に、4-（2）働くことのよさを感じて、みんなのために働く）、意志決定能力（1-（2）自分がやらなければならない勉強や仕事は、しっかりと行う、1-（3）よいことと悪いことの区別をし、よいと思うことを進んで行う）と結びつけたカリキュラムを提案している。同様に加藤・松尾が「中学校3年間を通じたキャリア教育と道德教育」の観点からカリキュラムを提案している（千葉は同書（2006：pp58-71）において道德学習の計画案や展開案、実践例（2年・3年・6年）も提示している）。

なお大阪府HPではキャリア教育と接続した道德教材を公開している（<http://www.pref.osaka.lg.jp/shochugakko/yume/>）。

先進事例が増え、資料も公開され始めているところ、今後はこうした事例や情報の共有や普及、現場教員への研修等が課題となってくるかもしれない。

高等学校における実践例

西野（2012：pp71-80）は京都府立久美浜高等学校、石川県立金澤錦丘中学校・高等学校、茨城県立岩井西高等学校の3校を紹介する。例えば、久美浜高校では道德教育のカリキュラムとして「生き方の時間」を設定し、I 高校生活「自分自身を知り、高校生活の中で自分を確立しよう」、II 自尊・他尊「自分を大切にすること・他者を大切にすることについて深く考えよう」、III 命「命を考えよう・命にふれよう・育てよう」、IV 地域社会・国際「地域をみつめなおそう・地域の人と話してみよう」「世界と自分・日本と自分・地域と自分」、V 将来「自分の生き方を考えよう。自分の進路（将来）をみつめよう」という5つのテーマを設定し、講演やビデオ鑑賞、美化活動、就職面接ロールプレイング、今までの振り返りと将来のキャリア・デザイン等を通じて道德教育を行ったことを報告している。結果「生徒が求めるもの、教師が

生徒に求めるもの、そこから出発したカリキュラム開発が、「将来」という視点を強く意識することによって、「生徒が社会に求めるもの」、さらに「生徒が社会から求められるもの」に課題として向き合うようになったことが研究報告書から伺える。「自分の生き方を考える学習活動へつなげるカリキュラムとなっている」（西野、2012：p74）と整理している。

また内藤（2006：pp44-53）は、高等学校における3年間の進路指導計画から「総合的な学習の時間」におけるキャリア教育に焦点を絞り、中学校における「道徳の内容」との関連性を再確認することにより、道徳教育とキャリア教育を統合した生き方教育プログラムを提示している。

今後、高等学校においても「事例や情報の共有」「普及」「教員研修」等が課題となってこよう。

おわりに

道徳教育の強化については、「特定の価値観の押し付け」につながるのではないかといった批判があり、この点については、平成26（2014）年の答申でもふれられている（p2）。こうした批判に対し同答申では「道徳教育の本来の使命に鑑みれば、特定の価値観を押し付けたり、主体性をもたず言われるままに行動するよう指導したりすることは、道徳教育が目指す方向の対極にあるものと言わなければならない。むしろ、多様な価値観の、時に対立がある場合を含めて、誠実にそれらの価値に向き合い、道徳としての問題を考え続ける姿勢こそ道徳教育で養うべき基本的資質であると考えられる」としている（pp.2-3）。ただし、児童生徒の発達の段階に照らして、「社会のルールやマナー、人としてしてはならないことなどについてしっかりと身に付けさせること」が必要不可欠であり、このことは、一面においては、「価値の押し付け」と捉えられる危険性も孕んではいるが、「真の目的は、ルールやマナー等を単に身に付けさせることではなく、そのことを通して道徳性を養うこと」であり、「必要があればそれをよりよいものに変えていく力を育てること」、

すなわち、価値を批判的に検討し、変えていくことをも目指していかなくてはならないとしている（p3）。

こうした指摘をふまえつつ、児童・生徒の立場に敷衍して考えれば、このことは、「自分なりの価値基準」、「社会と自分とを摺り合わせる基準」、「社会に向かう態度や姿勢」を持つこと、すなわち「自律性」を持つことに他ならない。道徳教育を「役に立っていない（ように見える）ので不要」「児童・生徒の実態に合っていない」というのは簡単だが、平成19年度の文部科学白書では、「子どもたちの心の現状」として「子どもを取り巻く環境の変化、家庭や地域社会の教育力の低下、体験の減少等の中、生命尊重の心の不十分さ、自尊感情の乏しさ、基本的な生活習慣の未確立、規範意識の低下、人間関係を形成する力の低下など、子どもの心の活力が弱っている傾向がある。また、社会参画への意欲や態度の形成が求められている」ことを指摘している。こうした認識や子どもの現状を踏まえるならば、児童・生徒の「自分なりの価値基準」、「社会と自分とを摺り合わせる基準」、「社会に向かう態度や姿勢」、「自律性」を育てていく必要性は一層高まっているといえる。

西野（2012：pp 67）は「そもそも、キャリア教育も道徳教育も、「生き方」に関わる教育である。「職業」を子どもの将来の生き方として捉えれば、キャリア教育も道徳教育も全人的な「生きる力」を育てる教育といえよう」としつつ、「道徳教育とキャリア教育の統合において、最も重要な課題は、勤労観以外の学習をいかに充実させていくかである」として①「生き方」の学習として内容や教材を広げる、②キャリア教育で育てる「能力・資質」と道徳教育の「内容」をつなげることを提言している（pp80-81）。

教育再生実行会議の第五次提言「今後の学制等の在り方について」（平成26年7月3日）においては「実践的な職業教育を行う高等教育機関を制度化」、「職業教育は、若者が自らの夢や志を考え、目的意識を持って実践的な職業能力を身に付けられるようにするとともに、産業構造の変化や技術革新等に対応して一層充実を図ること」、「大学、高等専門学校、専門学校、高

等学校等における職業教育を充実するとともに、質の高い実践的な職業教育を行う新たな高等教育機関の制度化」等の必要性についての提言が行われている。だとすれば、小中学校（及び高等学校）における道徳教育ならびにキャリア教育でも、その萌芽となる勤労観・職業観・人生観などの価値基準や自律性を育てていく必要が生じる。また平成26（2014）年の中央教育審議会答申「道徳に係る教育課程の改善等について」では「多様な価値観がある場合の対立がある場合を含めて、問題を考える姿勢こそ養うべき」だと指摘し、自己を受け入れ、他者を受け入れるキャリア教育も必要であることが示唆されている。

現状において、道徳教育では「自分自身」「他の人とのかかわり」「自然や崇高なものとのかかわり」「集団や社会とのかかわり」の4分野を扱うこととされている。今後ともその内容・方法論・評価方法について多面的に検討されることが期待されており、平成26年の答申を受けて、「道徳の時間」を「特別の教科」へと位置付け、「道徳教育の改善・充実」が具体的に図られていくことが予想される。本稿で確認してきたように、道徳教育の中でキャリア教育が果たす役割は大きい。キャリア教育分野の側から、また、キャリア教育の視点をもって道徳教育のあり方を検討することによって、より活発に道徳教育についての実践・研究を進めることが必要であるだろう。今後の教育改革の動向をふまえて、さらに検討を進めていきたい。

付記

本研究は JSPS 科研費 90610874、26381090 の助成を受けたものです。

参考文献

押谷由夫、内藤俊史編著（2012）.『道徳教育への招待』. ミネルヴァ書房.
加藤康、松尾陽一（2006）.「中学校3年間を通じたキャリア教育と道徳教育」三村隆男（編）『キャリア教育と道徳教育で学校を変える！』（pp.35-43）実業之日本社.
学研HP『学校教育ネット 編集部ブログ』

「文科省「私たちの道徳」（旧「心のノート」と道徳副読本」<http://gakkokyoiku.gakken.co.jp/blog/2014/03/post-36.htm>
首相官邸HP「教育再生実行会議「今後の学制等の在り方について」（第五次提言）」http://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaizei/pdf/dai5_1.pdf
千葉高（2006）.「小学校6年間を通じたキャリア教育と道徳教育」、三村隆男（編）『キャリア教育と道徳教育で学校を変える！』（pp.28-34）実業之日本社.
中央教育審議会（2008）.『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）』.
中央教育審議会（2011）.『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）』.
中央教育審議会（2014）.『道徳に係る教育課程の改善等について（答申）』.
徳丸幸夫「研究主題「キャリア教育の視点に立った夢や希望をはぐくむ道徳の時間の指導の工夫ーロールレタリング（役割交換書簡法）による試みを通してー」, 東京都教職員研修センター報告書. <http://www.kyoikukensyu.metro.tokyo.jp/09seika/reports/files/kenkyusei/h17/k-30.pdf>
内藤研一（2006）.「高等学校3年間におけるキャリア教育と道徳教育」、三村隆男（編）『キャリア教育と道徳教育で学校を変える！』（pp.44-51）実業之日本社.
西野真由美「高等学校における道徳教育とキャリア教育ー総合的アプローチの可能性」, 2012, 職業とキャリアの教育学, 19, 67-83
大阪府HP「夢や志をはぐくむ教育」<http://www.pref.osaka.lg.jp/shochugakko/yume/>
三村隆男編著（2006）.『キャリア教育と道徳教育で学校を変える！』. 実業之日本社.
三宅晶子（2003）.『心のノート』を考える』. 岩波書店.
文部科学省（2011）.『高等学校キャリア教育の手引き』教育出版.
文部科学省（2011）.『中学校キャリア教育の手引き』教育出版.

文部科学省 (2012). 『小学校キャリア教育の手引き〈改訂版〉』. 教育出版.

文部科学省HP「平成19年度 文部科学白書」
(第1部、第2章、第2節1) http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab200701/001/002.htm

文部科学省HP「道徳教育について」http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/doutoku/07020611/001.htm<http://www.jssvte.org/>

文部科学省HP「新学習指導要領・生きる力」
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2011/03/30/1304417_001.pdf.

文部科学省HP「道徳教育実施状況調査（平成24年度実施）」http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2013/01/04/1282847_1.pdf